

校長室

だより



R7.9.2 Vol.17

二学期が始まりました！

二学期がスタートしました。子供たち、事故に巻き込まれたり大きなけがをしたりすることなく、元気に登校してきました。何よりの喜びです。

今学期スタートの始業式でも子供たちに「小さなチャレンジの扉を開き続けてくださいね。」という話をしました。

言うまでもないことですが、新しいことにチャレンジすると、今まで知らなかったことが見えてきます。知らなかった世界が開けてきます。そして何より、心も体もワクワクしてくる気がします。しんどいこともあるかもしれませんが、その先には必ず達成感や充実感という楽しさが待っています。そんな経験や体験を数多くしてほしいと思っています。

それは必ず子供たちの将来につながりますし、心豊かな毎日、人生を作ってくれるはずです。今学期も子供と共にチャレンジしたいと思います。

賞状伝達

二学期始業式、式後に賞状伝達も行いました。今回は7月23日に行われた市内水泳記録会の賞状伝達でした。6位入賞の賞状の他にも、愛媛県小学校体育連盟が設定している標準記録を突破した児童に贈られる記録賞という賞状があります。その賞状を6年生の一人の男の子が手にしました。私は昨年頃から真穴っ子たちの泳ぐ姿を見ていますが、今年の練習を始めた頃、この男の子は息継ぎもままならず、25m泳ぎ切るのがいっぱいいっぱい！そんな状況でした。しかし、しんどい練習に真摯に取り組み、泳ぎが少しずつ変わっていき、記録会当日、堂々と練習の成果を発揮して手にした賞状です。

賞状をもらうことはもちろんうれしいことですが、男の子は「頑張ればできる」という自信を手に入れたのではないのでしょうか。この子のこれからの生活において糧になるものだと感じています。

四方山話真穴 ver2. 其の十七(焼き場に立つ少年)

子供たちが元気に登校し、二学期が無事始まったこと、嬉しく思っています。校報でも触れましたが、今年は戦後80年の区切りの年です。この便りでは、実際に残る写真から戦争について少し考えたいと思います。

左下の写真をご覧になったことがありますか？これはアメリカの従軍カメラマンの方が戦後日本の戦災地を訪れ、記録に残した中の一枚です。小学生くらいの男の子が弟をおぶって立っている写真です。戦争の学習の中で私が初めてこの写真を見た時(学生の頃から教師駆け出しの頃だったでしょうか)、焼け野原に見える場所で、しかも裸足で予守り。敗戦直後は本当に厳しい状況だったんだろうなあと感じていました。それだけでも戦争の怖さや悲惨を感じていたのですが、戦争についていろいろな学びを進めていくと、これは全く違った状況でした。



写真のタイトルは「焼き場に立つ少年」焼き場とは火葬場の事です。長崎も被爆地となりました。おびたしい数の人が亡くなり、火葬する人の数も想像を絶するものだったのでしょう。これはその火葬を待っている少年の写真でした。背中に背負っている幼子は眠っているのではなく、亡くなっているのです。

私の中で心が大きく揺さぶられました。この少年は何を思っているのだろう。なぜこんな姿勢でこんな表情なのだろう。親に焼いてきなさいと言われたのだろうか。そもそも親は生きているのか。どんな気持ちで亡くなった幼子をおぶっているのか。

この少年は弟が焼かれている間、直立不動のまま、弟が灰になっていくその様子をずっと見守っていたのだそうです。決して忘れてはいけない記録と記憶だと思います。

----- 切り取り線 -----

便りの感想や学校への要望等ありましたら、お聞かせください。今後の学校経営・運営に役立てていきたいと思っています。